

名古屋共立病院(名古屋市中川区)は、メスを使わずに超音波で脳内を治療し、体の震えを止める集束超音波治療器を、中部地方で初めて導入した。数時間で治療でき、副作用が出ていないか調べながら比較的安全的に治療を進められ、翌日に退院できる。先日あった治療の一部始終を取材した。(稲田雅文)

体が震える「本態性振戦」患者救う

名古屋共立病院 集束超音波治療

大小二つの渦巻きが印刷された紙を前に、愛知県の女性(左)が右手にサインペンを持った。肘を浮かせながら、渦巻きや直線に沿ってペンを走らせるテストだ。紙にペンを近づけた途端、手が大きく震え、うまく線が引けない。線は大きく波打ち、渦巻きや直線を大きくはみだした。

「若いころから、試験など緊張する場面で人より震えるのを自覚していた」と話す女性は、年齢を重ねるとともに体と両手の震えがひどくなっていった。安静にしていると何ともないの



超音波を一点に集中するヘルメットのような治療器を頭にかぶり、治療を待つ女性(名古屋市中川区の名古屋共立病院で)

脳へ照射 即効性に驚き

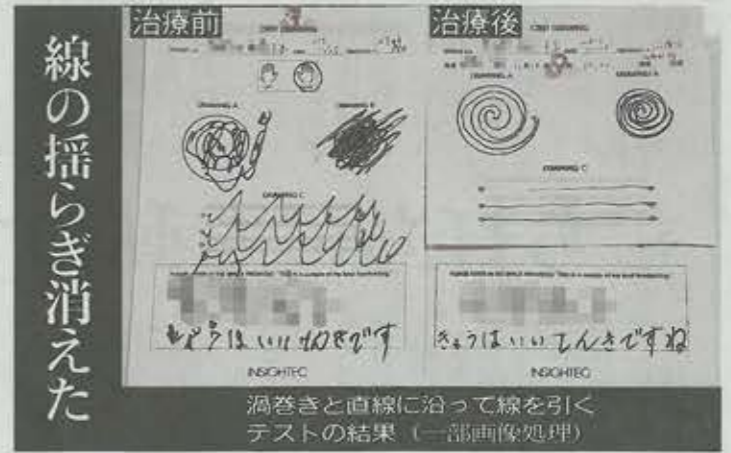
「人生あきらめた方が楽かな」と思い詰めた。別の病院で処方された薬も効果が出ず、今年の春に同病院のふるえ外来を受診。集束超音波治療センターの加藤祥子医師(三)は、本態性振戦と診断した。本態性は原因が分からないことで、振戦は震えを指す。この治療は、昨年十二月に厚生労働省が薬事承認したばかりで、まだ健康保険は使えない。自由診療で二泊三日の入院と治療、前後の診察、検査などで二百万円がかかるが「また、はりきゅうをしたい」と治療を決断した。

治療器は磁気共鳴画像装置(MRI)と組み合わせることで、脳の断層の画像を見ながら進める。午前八時半ごろ病室を出た女性は、冒頭のテストをした後、髪をそり上げ、治療器に頭を固定するための枠を付け、九時二十分にMRI室へ入室。治療台に横たわり、大きなヘルメット状の装置に頭を入れた。

本態性振戦は、脳の深部にある「視床」という感覚を中継する部分の一部が関係することが分かっている。治療器は、千二十四個の発信器が組み込まれ、超音波のエネルギーを一点に集中。五、六程度の範囲の温度を上げ、細胞を変性させて震えを抑える。

津川隆彦センター長(五)や協力をしている名古屋大病院脳神経外科の医師二人、治療器のメーカーの技術者らが、MRIが撮影した脳の画像を注視する。治療する部位が少しでもずれると、手のしびれや手足の力が入りにくくなるなどの副作用が出る可能性がある。頭の位置を微調整するなど、一時間半ほど作業を

副作用確認しつつ8回



線の揺りぎ消えた 渦巻きと直線に沿って線を引くテストの結果(一部画像処理)

「二回目、超音波照射します。十時五十分に加藤医師が合図をすると、十秒ほど超音波を照射。治療部位を探るための照射だ。三秒に一度、MRIから送られてくる画像から、照射位置と温度変化が分かる。最初の照射で温度を示すグラフが四四度まで上昇した。この温度なら照射部位の脳細胞は生きていくという。四回目の照射で正確な部位を探り当てることができた。」「少し書きやすくなりました。体の震えが少なくなりました。照射のたびに、MRIの中で寝たまま渦巻きを書くテストをし

健康保険適用されず

が大きい、この病気で死亡するのではないため、治療に踏み切らないケースも多いという。集束超音波による治療は子宮筋腫でも実用化されているが、本態性振戦への応用は国内では臨床研究の事例も含めてまだ約百二十例

開頭手術より負担軽い

本態性振戦の患者は、中高年に多いものの「高齢になれば仕方がない」と、治療をしない人は多い。服薬治療から始め、効果がない場合は手術などを考える。一般的な治療法は、脳に針を刺して治療部位を熱で固める高周波凝固術か、電極を刺して刺激をする脳深部刺激療法で、いずれも開頭手術が必要。患者の負担

え外来ではまず、震えの原因を特定する。本態性振戦と診断されたら服薬治療までは健康保険が使える。服薬の効果が上がらなければ集束超音波による治療を選択でき、自由診療となる。パーキンソン病の治療に

この記事は発行元の許可を得て掲載しております。
2017年12月5日 中日新聞朝刊
許諾番号：20181228-22171